

書評

高木信著

『亡霊たちの中世 引用・語り・憑在』

牧野 淳 司

平安時代末に起こった全国規模の内乱（治承・寿永の内乱、いわゆる源平合戦）で、多くの人の命が失われた。この内乱を題材にした『平家物語』は十三世紀前半に成立したと考えられている。この物語が、死んだ人の魂にどのように向き合っているか、関心を持っている。

『平家物語』はよく「鎮魂」の物語だと言われるが、「鎮魂」とはどういうことなのか。最近、佐伯真一氏は『平家物語』の「鎮魂」論について、いくつか文章を書いている（佐伯真一「『平家物語』は鎮魂の書か」松田浩・上原作和・佐谷眞木人・佐伯孝弘編『古典文学の常識を疑う』勉強出版、二〇一七年など）。その整理によれば、これまで『平家物語』研究の「鎮魂」論には、主に二つの方向があった。一つは死者の側に立った語り（死者の霊に語らせた上でそれを鎮める）で、もう一つは生者の側からの語り（死者を美化し同情を盛りこんで慰める）である。だが、現存している『平家物語』は、

平家の亡魂の思いを代弁した作品とは言い難いし、平家の人々をひたすら讃美しているわけでもない。したがって、さらに別の語りかけを想定しなければならないと佐伯氏は述べている。具体的には「威圧・説得」の「鎮魂」で、亡魂に対して、説得できそうな相手であれば説得の論理を説き、威圧すればすみそうな相手であれば威圧するというものである。「鎮魂」は生者と死者の関係によって自在に姿を変える緊張に満ちた駆け引きであった。親しい死者には心から哀悼の言葉を連ねてその声に耳を傾け、強大な怨霊にはひたすら恐懼して讃美の言葉を並べるが、時には説得・威圧の論理も駆使する。今、『平家物語』の「鎮魂」の内実について、考え直してみるべきだと私は考えている。そのような中、高木信氏の『亡霊たちの中世 引用・語り・憑在』（以下、本書と言う）を手に取った。

高木氏が〈怨霊〉と〈亡霊〉とを区別して論を展開し

ていることは知っていた。本書の序章でも引用されているが、真名本『曾我物語』の虎が、恋人であった曾我十郎の^{すがた}軀を見る場面が印象的である。虎が昔のことを思い出して涙を流している時、庭の桜の枝が斜めに垂れ下がっているのを十郎の姿と見て、走り寄って抱きつくようにしたが、ただの木の枝なので前のめりに倒れてしまった。その時から虎は病になり六十四歳で死去したという。この場面を引用して、高木氏は〈亡霊〉を説明していた。

〈亡霊〉は親しかったものに一瞬の交感として回帰してくる。それは意味あるもの以前の存在であり、表象できないもの、ひっそりと近くにいるように感じられるモノであった。そしてそれは、〈怨霊〉とは異なるものである。〈怨霊〉は、共同体や国家のために、生き延びた人々のために、登場させられ、利用される。何年も前に、高木氏の〈亡霊〉論を読んで印象に残っていた。今回の本は〈亡霊〉を軸に、『平家物語』や『義経記』『曾我物語』謡曲、室町時代の物語などを自由に往還し、さらに『伊勢物語』や『源氏物語』の引用にも注目して、中世のさまざまなテクストが〈亡霊〉を出現させる機制を捉えてみせたものであると言えよう。

本書における高木氏の思考に大きな影響を与えている人物の一人がジャック・デリダである。高木氏はデリダが喪の作業を二種類に分けたことを紹介している。一つは「取り込み」、もう一つは「体内化」である。「取り込み」は〈他者〉を忘れることで〈他者〉を記憶する。〈他者〉は私自身の一部となり、私とナルシスティックな関係を結ぶ。しかし、これは偽りの、不誠実な喪であると思われる。それに対し、本当の喪が「体内化」である。ここでは〈他者〉は自身の一部になるが、異質なものとして同化されないまま残存する。これは喪の失敗であるが、〈他者〉の〈他性〉を尊重する唯一の仕方であり、本当の喪は失敗することではなく、つまり不可能な喪であることではなく、あり得ないという。これを読むと、死者に対して誠実であること、正面から向き合うことが、いかに難しいことであるか考えさせられる。生きている相手であれば、どう向き合ったらよいか、相手の態度や言葉から考え直すことができる。しかし、死んだ人はもう目の前にいないし、何も言わない。その思いについて、一度分かったつもりになってしまえば、それ以上、考え直すことはあまりしなくなる。しかし、それではいけないのである。死者とともに生きていくということは、自分はまだ理解できていない思いがあるかもしれないこと、死

者が自分に気付いてほしいことがあるかもしれないことを、常に意識しながら生きることである。これは病的な生き方で、ほとんど不可能に思える。死者を別世界に送り出し、気持ちに整理をつけなければ、人は生きていけない。だが、ふと死者の声に耳を傾けなければいけないと思う瞬間が訪れるかもしれない。その時に、勇気をもって（今までの自分が崩壊することを覚悟して）死者に向き合うことができるか、試されるのであろう。そのような瞬間を生み出すものとして、〈亡霊〉があるのかもしれないと考えた。

高木氏はデリダの喪の作業を序章と第四章の注で紹介しているが、デリダのいう「取り込み」に相当するのが怨霊であると言う。生者によって〈絶対的他者〉性を抹消されて現世に召喚され、〈想像的他者〉として捏造され、利用される存在である。対して「体内化」に当たるのが亡霊である。それは〈絶対的他者〉のまま生者を訪れる。

さらに高木氏は、〈絶対的他者〉である死者について語り、書くことは、本来的に「体内化」であらざるを得ないと言う。語る主体や書く主体が〈絶対的他者〉のすべてを理解し、代弁し、表象することはどうしても不可能だからである。語る主体は死者を理解可能なものとし

て表象しようとするが、語りきれない部分（限界）があり、テキストはそれでも語ろうと不可能な試みを続ける。その時、テキストは〈亡霊〉と関わることになる。テキストは不可能な喪の作業をしつづける運動体になるのである。本書の試みを簡単にまとめてしまえば、中世のさまざまなテキストが〈亡霊〉を出現させる瞬間（不可能な喪の作業を続けようとする様子）を、いくつかの角度（語り・引用など）から示して見せたものである。

なお、序章では、宮部みゆき『孤宿の人』、黒木和雄監督作品『父と暮せば』、軍記物語の覚一本『平家物語』や真名本『曾我物語』などが、〈亡霊〉と交感しながら、喪の作業を継続しているテキストとして挙げられている。ただ、覚一本『平家物語』が『太平記』や藝能とは違う語り方をしていると述べた箇所は、読者の誤解を生むかもしれないと感じた。

軍記物語の覚一本『平家物語』や真名本『曾我物語』は、まさに事件を、死者を、語り書かねばならなかったのだ。流布本『曾我物語』や『太平記』、藝能とは違う形で。死者に寄り添う形で、〈亡霊〉と交感しながら。喪の作業を継続することを忘れないために。死者に近い者として。語ること、書くことの責任を担ったテキストとして（36頁）。

とある。ただ、覚一本『平家物語』と藝能や『太平記』との違いとして序章で指摘されていることは、覚一本には「平家の怨霊のゆゑとぞおぼえける」とはあるが、怨霊が身体をもって登場していいのに対し、藝能や『太平記』では平家の怨霊が発話し行動する身体を有した存在として登場している、という点である。実際に怨霊が登場しているか否かということだけで、『亡霊』とかかわるテキストかどうかが判定されるわけではないことは本書を読めば分かるが、序章だけを読むと、形を持つ怨霊が登場するか否か、あるいは『亡霊』的存在が描かれるか否かを基準に、中世の諸テキストを選別していこうとするものと受け取られてしまう危険があるように感じた。

本書には、いくつかのテキストを比較して、あるテキストは『亡霊』と関わる点で評価できるが、あるテキストはそうでないから評価できない、という書き方をした部分がないわけではない。しかし、そのような選別・評価は予想していたほどは多くなかった。テキスト（諸本）を比較評価していくことより、あるテキストに『亡霊』が出現する様をとらえていくことに重点が置かれており、納得しやすかった。それに対し、本書全体の見取り図を分かりやすく示す役割を担っているのが序章であるから

仕方がない面もあるとは思うが、覚一本『平家物語』や真名本『曾我物語』と、流布本『曾我物語』、『太平記』、藝能とを対立させた書き方はやや単純化し過ぎた記述になっているのではないかと感じたのである。

ここで第Ⅰ部の目次を紹介する。序章の後、本論は二部構成となっている。第Ⅰ部「ナラティヴの亡霊」の構成は、以下の通りである。

第一章 亡霊の時間／未来からの記憶、あるいは「今・ここ」が散種される

第二章 語る亡霊のスクランダル、あるいは『亡霊機械』が『語り』を流動化する

第三章 『不在の原因』としての平家一門、あるいは現実界に『亡霊』を登録する

第四章 『死者／動物』への生成変化、あるいは『狩猟機械』が起動する

第五章 『カタリ』の亡霊論(hantologie)的転回、あるいは「話法」による『亡霊』への生成変化

取り上げられているテキストや事柄を、省略した各章の副題から示すと、『義経記』、謡曲『二人静』、『伊勢物語』、謡曲『鵲』、『平家物語』「鵲」、和泉式部、謡曲『

八鳥》、那須与一、『平家物語』成立伝承、謡曲《善知鳥》、カムイ・ユカラ、和歌のレトリック、語り物文藝、『平家物語』『小教訓』、自由間接話法となる。初出を見ると、二〇一四年から二〇二〇年に書かれたものであり、第Ⅱ部と比べて比較的新しい論文が集められている。第Ⅱ部に比べて、第Ⅰ部は理論構築を目指そうとする志向が強いように思われた。重要な柱が語り論で、高橋亨氏が述べた「心的遠近法」、藤井貞和氏が提案した四人称の概念、三谷邦明氏が導入した自由直接話法・自由間接話法といった理論の有効性を継承しつつ、それらがなお、語りを分類するためのものという側面を持つことを問題化する。むしろいくつかの語りが生成し、それとともに主体が転移し複数化されることで、テキストから予想もしなかったような声が聞こえてくる瞬間をとらえるための語り論を生み出そうとする。それは図式的に把握できる明確な形をもった理論というよりは、今のところ、分析対象となるテキストや分析の視座に合わせて、より洗練されたものへと変化していく途中段階にある。もちろん、本書には現段階における分析の到達点が表示されている。第Ⅰ部は図や表がとりわけ多いが、これは高木氏が分析をなるべく分かりやすい形で提示することを重視していることを示すであろう(図4「能における亡霊論的

生成変化」、図5「〈カタリ〳〵語り／騙り〉のイメージ」など)。そして、図式化は、高木氏がより包括的な理論の構築を目指そうとしていることも表している。そしてそれは、まだ暫定的で今後、姿を変えていくものである(図6「死者表象の暫定的な図式化の試み(二〇二〇年ヴァージョン)」など)。

興味深い分析が多い中、『平家物語』の冒頭である「祇園精舎」に触れた箇所は少し分かりにくかった。無常観を表現したものとして有名だが、兵藤裕己氏は王権に反逆したものは全て滅びる王権因果論を示したものであるとした。続いて高木信氏は『平家物語』装置としての古典(春風社、二〇〇八年)で、悪行人の例から天皇家や摂関家の人間および夷狄が除外されていることを指摘した。本書ではさらに、平将門・藤原純友・源義親・藤原信頼について、その討伐には平家一門が関わっていたことに注意が促される。そしてこのような選択的で限定的な悪行人の表出は、逆接的に清盛一族の武勇という潜勢力を発生させるとした。このことは理解できたが、これにより亡霊的な平家一門が呼び起こされるという点については、すぐには受け入れにくかった。一般的な悪逆人の滅亡を描こうとする欲望が、王権に叛逆した者は必滅することを語ってしまうことで破砕され、さらに不

在化されている清盛一族の武威が登録されることで、『平家物語』が「死者たちに寄り添うテキストである可能性」が拓かれるという。語りの構造的な問題を言ったと理解すればよいかもしれないが、不在の武勇（武威）の登録が、どういう形で死者に寄り添う可能性へと繋がっていくのか、考えてしまった。

続けて第Ⅱ部「インターテクスチュアリティの亡霊」の目次を紹介する。

第六章 見えない〈桜〉への生成変化、あるいはテクストが〈亡霊化〉する

第七章 能を観る〈紫式部〉、あるいは「海人の塩焼く」言説が混線する

第八章 『平家物語』を読む〈紫式部〉、あるいは〈不在の原因〉としての平将門

第九章 混線する〈重衡物語〉のことば、あるいはインターテクスチュアリティが〈亡霊〉を産出する

第十章 小宰相と小野小町との絆、あるいは男たちの〈欲望〉を逆なでする

第十一章 〈貴種流離譚〉に潜むディアスポラ性、あるいは女性たちの彷徨が可能性を拓く

第十二章 『源氏物語』を引用する『平家物語』／

『平家物語』を引用する『源氏物語』、あるいは新しい〈読み〉の可能性が拓かれる

具体的に取り上げられている題材を、省略した各章の副題から列挙すると、『平家物語』「忠度都落」「忠度最期」、謡曲《忠度》、『平家物語』「福原落」、『源氏物語』、『太平記』、謡曲《須磨源氏》《敦盛》、「福原」、「須磨・明石」、「都」、謡曲《重衡》《千手重衡》、『和漢朗詠集』古注釈、『伊勢物語』、『平家物語』「小宰相身投」、室町時代物語、謡曲《卒塔婆小町》、謡曲《隅田川》、御伽草子、『伊勢物語』、『維盛と光源氏』、「高倉帝と桐壺帝」となる（重複を厭わず挙げた）。初出を見ると、第十二章が二〇〇五年に、第六章から第十一章が、二〇一一年から二〇一六年の間に書かれている。第Ⅰ部より以前に書かれた論文が多くなっている。第Ⅰ部が理論を構築しようとする志向が強かったのに対し、第Ⅱ部は個々のテクストに即した分析の実践例という性格が強いように思われた。特に第Ⅱ部全体の題に「インターテクスチュアリティ」とあるように、テクスト間の引用関係に着目している。それは、必ずしも前後関係にこだわるものではない。章題にも「能を観る〈紫式部〉」とか、「『平家物語』を引用する『源氏物語』」とあるが、一つのテク

ストの読解に、まだ成立していないテキスト（それより後の時代のテキスト）の引用も認める立場から分析が行われている。古典テキストを読んでいると、なぜここにそれを引用するのか分からない場合や、この引用はこの場面には合わないのではないかと思うことが多々ある。

そのような場合、引用に隠された深い意味を探るか（その結果、発見できる場合もある）、名文を使ったり知識を披露したりしたもので意味はないと判定するか、いろいろな形で対処する。本書のような、前後関係を無視した引用の考察方法は一般的ではないが、古典文学における引用とは何なのか、あらためて考えてみる必要性を感じた。文脈に必ずしも合っていないテキストを引用して、あらたなテキストを作り上げていく、そのようなあり方自体を評価し直さないといけないのではないかと思った。別の観点からもう一つ述べたい。ちょうどこの春学期に授業で「忠度都落」を扱ったが、本書第六章を読んでいて、一人の学生のコメントを思い出した。本章段の末尾「其身朝敵となりにし上は、子細におよばずといひながら、うらめしかりし事どもなり」について、「覚一本では俊成がこう感じているように表現されているのではないかと考えました」と書いてあった。通常は俊成が忠度の歌を「読人しらず」として『千載和歌集』に入れた

ことを評した語り手の言葉と理解されるが、覚一本には忠度に対する俊成の思いがあふれているので、この解釈は決定的外れではないと思った。本書では、語る主体が、うらみがないはずの「忠度の心中を無視し、忠度を領有化してまで、忠度を悲劇的風流人としてかたどろうとする」一文とされているが、別の読みも可能かもしれない。兵藤裕己氏は木曾義仲が義経との合戦に敗れて没落していくさまを語る巻九「河原合戦」の「まして中有の旅の空、思ひやられてあはれなり」について、「この語り手は、いうまでもなく『平家』の歴史を語る匿名的で集合的な主体」であるが、現代語訳するとどうしても語り手イコール読者のセンチメンタルな思い入れが全面に出てしまうという。そのニュアンスで読むと「木曾最期」は義仲と今井兼平の友情物語のように解釈されるが、そのようなヒューマニスティックな読みは『平家物語』の文章に似つかわしくないと述べた（「声と知の往還——音声中心主義は形而上学か？」兵藤裕己編著『思想の身体 声の巻』春秋社、二〇〇七年）。本書では、第二章で巻四の「鵜」を扱っている。頼政が射止めたものを覚一本は「おそろしな子どもおろかなり」と言っているが、「語り手の感想とも、ご覧になった人の感想ともとれる表現」で「誰の内面かもわからない恐怖の表出」である

と書かれている。複数の主体・複数の視点が混入して、
するような一文について、あらためてその特質を見定めて
みることができるのではないだろうかと考えた。

私は唱導資料を読む立場から『平家物語』の性質を追
究している。追善仏事で導師が発する言葉は、神仏・施
主・聴衆に向けられるが、死者にも向けられる。法会
場で響く声は『平家物語』など中世のテクストと深く関
係していると思っている。そのような関心のもとで、こ
の書評の冒頭で取り上げた佐伯氏の提言も受け止めてい
る。それと本書の目指すところは直接交わるものとは言
えないが、テクストが不可能な営みを続けてもかく様子
を、語り方や引用に注目することであぶり出して見せる
本書の試みから、示唆を得ることが多くあった。

二〇二〇年三月二〇日刊、水声社、四六判、三八〇頁、

三八〇〇円＋税

(まきの・あつし／明治大学教授)